

# Book Review

## 歯科医院で取り組む TCH コントロール入門

齋藤 博 著/木野孔司 監修



Reviewer

馬場一美 Kazuyoshi Baba

(昭和大学歯学部歯科補綴学)

A4 判変, 72 頁  
オールカラー  
定価 (本体 5,000 円+税)  
医歯薬出版 刊



本書『歯科医院で取り組む TCH コントロール入門』は、その序文にあるように東京医科歯科大学歯学部顎関節治療部の木野孔司先生が 2013 年に出版された『TCH のコントロールで治す顎関節症』(医歯薬出版)の続編的な位置づけである。そして本書は開業医の立場から長年 TCH に関連した多様な臨床的問題に取り組んでこられた齋藤 博先生で執筆による、具体的かつ実践的な TCH コントロールの入門書である。

木野先生らにより提唱された TCH という呼称が普及し、その為害作用、特に顎関節症の悪化因子として広く知られるようになって久しいが、それを含めて TCH 関連の研究成果が着実に蓄積されつつある。その成果の一つとして、当初、臨床的観察や患者への問診から TCH を予測していたのに対して、携帯型の筋活動測定装置を使用した客観的測定が行われたことで TCH の実態が明らかにされたことがあげられる。その結果、患者によっては臨床的予測と比較してはるかに長時間、時には数時間にわたる TCH が認められ

ることが実証された。従来はパラファンクションといえば睡眠時ブラキシズムや強い咬合力を伴う日中クレンチングにのみ焦点が当てられていたが、むしろ弱い力しか伴わない歯の接触、すなわち TCH の為害作用のほうがより重篤な問題であることが示唆されるようになった。

もう一つの重要な点は、TCH がもはや顎関節症の原因としてだけではなく、セラミックスのチッピングから歯根破折、歯周病、部分床義歯の予後不良などあらゆる歯科的な問題に関連している可能性が複数の研究者により示唆されるようになった点である。この点については TCH が原因とされる臨床徴候と前述の客観的な TCH 測定データとを関連づける具体的なエビデンスも蓄積されつつある。

本書には、TCH コントロールの必要性、TCH のリスク診断と対応法、TCH コントロールを行う上での歯科衛生士が担う役割まで臨床例を交えながら簡潔に解説されている。特別な機器を用いた測定が不可能な臨床現場においては、正確に TCH の有無を予測

するためのリスク診断の方法を参照し (Chapter 2)、リスクに対応して合理的に対応することの重要性は言うまでもない (Chapter 3)。

TCH に対する現時点での標準的な対応方法である認知行動療法についても、ともすれば TCH 回避のための意識的なコントロールが推奨されることがあるが、むしろ逆効果であること、さらに脱力をさせるための具体的な方法については是非、読者に理解していただきたい (Chapter 3)。また、上記のように顎関節症に止まらず咬合感覚異常や補綴治療との関連性についてもふれられており、歯科治療全般の予後管理を行うために歯科医師が理解すべき内容を網羅した書といえる。

最後に、本書のもう一つのユニークな点として、歯科医師のみならず歯科衛生士を対象として、メンテナンス時の TCH コントロール法について解説されていることであり (Chapter 5)、歯科衛生士が TCH コントロールに参加することによる歯科医院運営上のメリットは計り知れない。